

獨協医科大学の学生 9 人

タイやアフガンの医療事情に深い関心

獨協医科大学の医学生4年生の9人が1日、城西病院を訪問し、「国際保健」をテーマに学習しました。介護老人保健施設「すばる」の荒川邦江施設長とアフガニスタン医師のアックパールさんの2人が講師になり、公益財団法人・茨城国際親善厚生財団「IIFF」の国際医療支援活動やタイ、アフガニスタンの医療事情などについて説明しました。

この学習会は、獨協医科大学の公衆衛生学実習の一環として行われ、「母子保健」、「産業保健」、「精神保健」など14のテーマを設定しています。

「国際保健」は公衆衛生学のテーマの一つで、学生たちは千種雄一教授とともに、国際医療支援を行っている「IIFF」での実際の活動から学ぼうと、開かれました。

荒川施設長は、1982年からスタートしたインドシナ難民の医療救援活動を皮切りに、アフガニスタン難民の医療救援活動、タイでの医療支援などの活動を説明しました。荒川施設長自身も長くアフガニスタン難民の医療救援活動に従事しており、アフガニスタンやパキスタンでの活動を紹介。2004年からタイ王室と連携し、麻薬地帯の少数民族を自立に導く「ドイトンプロジェクト」への取り組みなどを紹介しました。

アックパールさんは、アフガニスタンを中心とした「IIF F」の活動実績などを紹介。引き続き、アフガニスタンの実情や医療状況などを詳しく解説しました。

荒川施設長は「見えないところで医療を受けられない人がいっぱいいる。活動するには、まずその地域を知り、劣悪な環境でも十分活動できる知識を持たないといけな



荒川邦江施設長

アックパールさん



熱心に質問する学生たち

い」と指摘。アックパールさんはアフガニスタンの現状を「女性が15歳以下で幼くして結婚することが、妊婦死亡率や幼児死亡率の高さにつながっている。麻薬も蔓延している」と指摘。学生たちから、さまざまな質問が寄せられました。

平成26年10月2日

医学生が国際保健をテーマに学習



城西病院の院内を視察する学生たち



← 多田正毅理事長（左）の話を真剣に聴く学生たち

↓ 学生たちにアフガニスタン情勢を解説するアックパールさん

